

平成 30 年 5 月 27 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25244025

研究課題名(和文)比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究

研究課題名(英文)Comparative Colonial History: Colonial Administration and Center-Periphery Interactions in Modern Empires

研究代表者

宇山 智彦 (UYAMA, Tomohiko)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授

研究者番号：40281852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 35,620,000円

研究成果の概要(和文)：近代帝国の植民地および脱植民地化の歴史を、比較と関係性の視角から研究した。帝国権力と周縁・植民地社会を結ぶ媒介者・協力者の役割、植民地の知識人による近代化の試み、諸帝国の競存体制と植民地同士の関係、帝国・植民地における移民の位置づけ、帝国の暴力と反乱、第一次世界大戦とロシア革命のインパクト、脱植民地化をめぐる国際関係などを研究し、帝国論・植民地論の知見を現在の国際問題の分析にも応用した。全体として、帝国権力が国内外に作り出す格差構造と、植民地の被統治者の主体性の両方に目を配りながら、植民地史の多面性と今日的意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project studied the history of colonies of modern empires and their decolonization from the viewpoint of comparison and relationships. The main themes included the following: roles of intermediaries and collaborators in establishing and maintaining imperial power; attempts of colonial intellectuals at modernization; competing coexistence of empires and intercolonial relations; roles and statuses of migrants in empires and colonies; imperial violence and rebellions; impacts of World War I and the Russian Revolution; international aspects of decolonization. We also applied findings of the study of imperial and colonial history to analyses of today's international affairs. Overall, we elucidated power inequalities created by empires domestically and internationally, while attaching importance to the agency of colonial peoples.

研究分野：近現代世界史

キーワード：比較史 植民地 帝国 ロシア帝国 イギリス帝国 フランス植民地 日本帝国 清帝国

1. 研究開始当初の背景

植民地や帝国周縁の歴史に関する研究は、近年、2つの方向から発展してきた。一つは20世紀末以降世界的に隆盛を見せた帝国論であり、宗教的・民族的・地域的多様性の統治や、植民地での経験が本国の政治・文化に及ぼす影響といった観点からの研究が進められてきた。もう一つは、主として批判的観点からの植民地主義論であり、特に日本では日本帝国による朝鮮、台湾などの統治に関する研究が歴大にあるほか、「植民地責任」などをキーワードに諸帝国・植民地の比較も試みられている。この2つの論に明確な境はなく相補的なものだが、時に、帝国統治を肯定的に見るか否定的に見るかという、ややイデオロギー的な対立に結びつくことがある。また、個々の帝国・植民地に関する研究が飛躍的に増え、それら間にはある程度共通する問題関心が見られるものの、本格的な比較研究は少ない。

研究代表者は以前、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4班「帝国の崩壊・再編と世界システム」(平成20~24年度)の代表者として比較帝国論の研究を行い、多くの知見を得たが、現在の地域大国を中心とする当該領域研究の課題設定による制約も大きかったため、帝国よりも植民地に重点を移し、対象地域をユーラシア全体とアフリカに広げて、本研究を構想した。

2. 研究の目的

本研究は、近代の諸帝国が周縁地域・植民地をどのように統治したのか、中心と周縁の間にどのような相互作用・相互認識が生まれたのかを比較することを目的とした。主に取りあげたのは、ロシア、イギリス、フランス、日本といった、帝国主義を担った国々だが、清帝国のような、列強に侵食された帝国における中央・周縁関係にも注目した。比較帝国論、植民地研究、地域研究の成果に基づき、著しい多様性を抱える国家において生まれる統治技術や、学知と権力の関係、中央権力と在地権力の重層的構造、文化接触と近代化の関係、帝国崩壊後の遺産のあり方などに、諸国家・地域間でどのような共通性と差異が見られるかを明らかにすることを目指した。長期的には、帝国礼賛でないと同時に植民地主義の断罪にもとどまらない、新たな植民地史学の形成を志した。

3. 研究の方法

本研究では、さまざまな地域に関する一次史料に基づく研究成果を持ち寄って、比較のための議論を行うことを基本的な方法とした。史料収集は日本国内のほかイギリス、フランス、中国などでも行い、松岡洋右関連の手記・草稿、1960年代~70年代のアフリカにおけるソ連の反西側プロパガンダの史料といった貴重な史料も入手した。

議論の場は、一般的な研究会・討論会のほ

か、国際シンポジウム、国際ワークショップ、書評会などさまざまな形をとった。国際シンポジウム・国際ワークショップでは北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの全面的な協力を得、研究会開催においては同志社植民地主義研究会(DOSC)、サハリン・樺太史研究会、イギリス帝国史研究会などと連携し、多方面の研究者と協力して議論を深めた。

研究の視角・方法論としては、単に類型的・静態的な比較ではなく、関係性と動態を重視し、中央・周縁関係が、帝国間の関係や世界秩序と連動してどのように変化していたかを分析した。

4. 研究成果

本研究で明らかにしたことや、重要性を確認した論点を、以下7項目に分けてまとめる。

(1) 周縁・植民地の人々にとっての帝国権力の意味と近代化をめぐる諸問題

帝国権力と周縁・植民地社会を結ぶ媒介者・協力者の役割や、現地エリートの帝国権力に対する抵抗と協力の切り替えは、イギリス帝国史研究におけるロナルド・ロビンソンのコラボレーター論に触発されて、研究代表者が以前から考究してきた論点であり、本研究でも繰り返し議論の対象とした。「コラボレーター」という言葉が、特にフランス史・ドイツ史などでは主に第二次世界大戦期の対敵協力者を意味して極めて否定的なニュアンスを持つこと、イギリス帝国史研究においても近年はコラボレーター論はメジャーではないことから、最初のうちなかなか議論が噛み合わなかったが、最終的には、どの帝国・植民地においても現地有力者の協力と抵抗のあり方が重要な意味を持ったこと、ヨーロッパ諸帝国の植民地だけではなく、清帝国や日本帝国にもこの議論は適用可能であることが明らかになった。皇帝が統治下のさまざまな集団に対して相異なる顔を使い分けていたとされる清帝国において、新疆のムスリム有力者たちもまた、イスラーム的王公・指導者としての顔と皇帝の臣下としての顔を使い分けていたことに見られるように、現地有力者たちが受動的に帝国権力に協力・適応するだけでなく、帝国という環境の中で既存の社会秩序や自分の地位を保つために積極的な行動をしていたことは、注目に値する。

近代化の時代を迎えると、周縁・植民地の有力者や知識人たちは、社会秩序を保つだけでなく、帝國的・植民地的権力関係のもとでの近代化という切実で困難な課題に直面することになる。近年の帝国史研究(特にロシア帝国史)においては、帝国権力と周縁・植民地社会の関係が、ややもすれば調和的に描かれがちな傾向があるが、従属的な地位にありながら自力で近代化の道を切り開こうとした人々の、矛盾を抱えた必死な姿に改めて注目すべきことが再認識された。これらの人々は帝国によって自由を束縛される一方、帝国のリソースを近代化・自立に利用し

ようともしていたのであり、朝鮮史において論争的なテーマである「植民地近代」や「植民地的公共性」は、他のさまざまな植民地に関しても重要な問題である。また、世界の階層的な構造を認識し、自らの後進性の自覚と生存競争の感覚を得た植民地の人々は、近代化や「脱亜入欧」を議論した日本の知識人たちとある程度共通する方向性を持っていたと言え、さらにはこれらの認識・感覚と結びつく社会ダーウィニズムはそもそも西欧由来のものであったことを考えれば、近代において西欧帝国と非西欧帝国、帝国と植民地がそれぞれ異なる立場から抱えていた課題を、連続的にとらえることが可能になる。

（2）帝国間・植民地間の関係と「比較のポリティクス」

諸帝国が互いに争いながらも大国中心の世界秩序を維持するために手を結ぶ競存体制（山室信一）は、以前の新学術領域研究第4班（本報告書1参照）でも重要な研究テーマだったが、本研究ではこれに関する考察を、諸帝国間・植民地が互いの統治技術・運動技術や知識を互いに比較・参照・利用し合う「比較のポリティクス」（アン・ストーラー）の観点から深めていった。

この問題群が特に鮮明に現れるのは、後発の帝国であった日本帝国をめぐってである。日本は台湾などの植民地統治にあたり、ドイツのアルザス・ロレーヌ統治や東方植民に関心を持った。また20世紀初めの東アジアでは日本はイギリス帝国主義のパートナーで、日本がイギリスの帝国統治手法を学ぶ面も多かったが、第一次世界大戦が終わる頃からライバルとなった。日本が戦間期に国際社会で反人種主義・反白人支配を唱えたことは、この文脈からも理解できる。日本がイギリスのインド支配を批判したことはアジア主義の発展にとって大きな意味を持ったが、同時にイギリスが日本の朝鮮支配を批判したことの国際的な影響も無視できない。インドの民族運動家の中には、日本のアジア主義と朝鮮の親日派を支持する者と、朝鮮の独立運動を支持する者がいた。

比較のポリティクスは、同じ帝国の植民地・勢力圏の間でも作用した。日本が南方に進出して西欧諸国の東南アジア植民地を独立させようとした1943年、朝鮮人の間からは、南方未開の原住民に独立を与えるなら、当然われわれにも同様の栄誉を与えよという声が上がった。同年の大東亜会議などで諸民族の指導者が交流し互いの状況を知ったことは、日本の大東亜共栄圏構想の枠に収まらない民族運動の発展にも有益であった。欧州諸帝国の場合も含め、植民地同士の情報交流は、帝国側の意図とは別に、後の脱植民地化につながる効果を持った。

上記のほか、欧州帝国間の（日本帝国を含まない）連携において人種主義がしばしば作用したこと、イスラーム政策においてイギリ

ス、ロシア、フランスなどの間の相互参照が顕著に見られたことが明らかになった。

（3）帝国・植民地と移民・植民

移民・植民が、出身国・地域と移住先の国・地域双方にとって大きな意味を持っていたことは、本研究の中で繰り返し話題となった。イギリス系の移民がイギリスの植民地および「非公式帝国」の構築・維持に重要な役割を果たしたことは言うまでもないが、日本帝国にとっても移民は、国としての影響力拡大、国際的な反人種主義アピール、移民と現地社会のトラブルの対策など多様な文脈で意味を持った。イギリス帝国臣民として帝国内の移動の自由を主張したインド人のように、帝国との関係は移民にとっても利用しうるリソースであった。中央アジアではロシア系移民が、ロシア帝国の崩壊後もこの地域をロシア人を中心とする政治空間にとどめ、後にソヴィエト・ロシアへの回収を助ける役割を果たした。樺太/サハリンでは戦争と境界変動のたびにそれまでの住民の大多数が退去し、新たな住民が来ることで新しい本国との統合が図られた。移民・元移民が帝国崩壊・脱植民地化後の政治において持つ意味や存在感は国によって違っており、フランスでは引揚者（元・入植者）への支援が重視されている。ロシアでは引揚者や今も国外に住むロシア人個人への支援は弱い。他の旧ソ連諸国のロシア人住民の存在を外交戦略の道具として使う場合がある。

（4）帝国の権力行使とそれへの抵抗に伴う暴力の問題

帝国の統治はしばしば暴力を伴い、特に抵抗運動や反乱の鎮圧は過剰に暴力的になりがちだが、これは中心と周縁・植民地の異質性や地理的な遠さに由来する情報の不完全性によって帝国側が持つ不安や、統治の協力者を効果的に使えていないことなどの問題と関係していることが、ロシア帝国をはじめ多くの帝国の例で明らかになった。

反乱に関しては、図式的な民族闘争史観に囚われずに、反乱の原因・背景を多面的に理解することを心がけた。反乱は必ずしも植民地支配への全面的抵抗として生じたとは限らず、1857年のインド大反乱では軍や牢獄で人々がカーストの区別なく扱われることへの反発、中央アジアの1916年反乱では徴兵免除という約束が破られる可能性への反発といった、それまで保たれていた植民地支配と現地の社会秩序の均衡が崩れることへの反対が重要な動機となっていたことが確認できた。なお、1916年反乱については、研究代表者はクルグズスタン（キルギス）を拠点とする国際共同研究に参加しており、本研究の成果を踏まえた研究を今後も続ける予定である。

（5）第一次世界大戦・ロシア革命と帝国・

植民地

未曾有の規模の帝国間戦争であり、植民地の人的・物的資源を多く動員した第一次世界大戦は、帝国と植民地のあり方を大きく変えた。また、ロシア革命がそれまでの帝国競存体制の重要な柱の一つだったロシア帝国を崩壊させ、世界的な民族自決の動きに弾みをつけたことの意義は、社会主義革命としての輝きがあせた今も決して失われていない。本研究の実施期間は、大戦とそれに伴うさまざまな事件やロシア革命の百周年に重なり、これらの出来事の歴史的意義を考えるのにより機会となった。2014年7月の国際シンポジウム「危機の30年：第一次～第二次世界大戦期ユーラシアにおける帝国・暴力・イデオロギー」では、20世紀前半の戦争・暴力と帝国・植民地の交差に注目し、諸帝国間の境界地域が戦争の中で持った重要性、帝国主義の揺らぎ・変容・再活性化がもたらした暴力や新しい植民地政策、帝国主義と反植民地主義の間で生まれた多様な思想などについて議論した。

ロシア革命・ソ連と帝国・植民地の問題の関係については、2017年12月に国際シンポジウム「ロシア革命と長い20世紀」を開催したほか、岩波書店から刊行された『ロシア革命とソ連の世紀5 越境する革命と民族』に本研究の成果を盛り込んだ。ロシア革命と言えば一般的には十月革命に注目が集まりがちだが、旧ロシア帝国の諸民族の運動はもちろん、朝鮮独立運動など国外の民族運動にも二月革命が大きなインパクトを与えたことが確認できた。十月革命後、旧ロシア帝国の多くの民族が独立や自治を宣言してソヴィエト政権と戦ったにもかかわらず、ほとんどが敗北してソヴィエト・ロシアに回収されたことについては、軍事的な問題のほかに、諸外国の中途半端な干渉、特に連合国がロシアを分裂させず大国中心の国際秩序（競存体制）を維持しようとしたことや、ロシア人の民族主義・愛国主義を重要なファクターとして指摘した。

ソ連が反帝国主義を掲げながら、国内諸民族の独立を抑止し、国際的に大国としてふるまったことは、矛盾であると同時に、諸民族・外国とのダイナミックな相互作用を生んだ。ソ連の民族政策は限定的な意味でしか脱植民地化とは言えないが、諸民族の人材を登用し、経済面や文化面も含め、民族共和国の建設に諸民族を積極的に参加させることで、植民地帝國的なイメージを低減させた。ムスリム諸国との間では、ソ連はイギリス帝国主義を批判しつつ経済的・政治的に自らが優位になるような関係を作ろうとし、ムスリム諸国側は英ソの競合から最大限の利益を引き出そうとして、帝国と小国のバーゲニング関係の再現が見られた。

(6) 脱植民地化をめぐる国際関係

第二次世界大戦後のアジア・アフリカの脱

植民地化についてはさまざまな角度から研究したが、特に独立後のアフリカ諸国とソ連の関係について、独自性の高い成果を出すことができた。アフリカ諸国が独立後も実質的に西欧に従属させられ続けたとする「新植民地主義」論は、西欧諸国の政策の客観的な分析に基づいておらず、アフリカの主体性や自立性を軽視しているという意味で、オリエンタリズム批判と似た構造を持つ。しかし途上国の躓きを外部の原因のせいにする論であるため、アフリカ諸国の多くの指導者自身が好んでこの見方を唱え、ソ連もアフリカに進出する際に「新植民地主義」言説を積極的に構築・利用した。イギリスは自らの植民地主義のイメージを払拭しようとし、ソ連こそ中央アジアなどで植民地主義的にふるまっていると主張したが、支持は広まらず、東欧諸国と連携しながらアフリカ諸国と外交的・経済的・軍事的関係を深めるソ連の攻勢に脅威を感じた。他方、フランスから独立したアフリカ諸国では、共産主義陣営の進出を警戒してフランスとの関係を維持・強化する動きも見られた。

旧植民地が独立しても世界が階層的構造を持つことは変わらず、新独立国が力の差のある国々と交渉しながら、政治・経済的にも精神的にも依存と自立志向を併存させるという状況は、脱植民地化の時代を理解するために重要である。同時にこの時代は、旧宗主国が国際社会における自らの新しい位置を模索していた時代であり、新独立国側が巧みな戦略によって利益を得ることもできた。1960年代後半から70年代には、イギリスが経済的にアフリカから撤退してアジア、特にインドへの援助に重点を移したと先行研究では言われているが、このアジア・シフトはイギリスの明確な戦略によって起きたものではなく、イギリスが国際政治・国際援助における主導的役割を果たす余力を失う中で、むしろインドなどアジア側の事情やイニシアティブによって起きたことが本研究で明らかになった。

(7) 帝国論・植民地論の視点から見る現在の国際問題

帝国論・植民地論の知見を現在の国際問題の分析に応用したことも、本研究の特色の一つである。特に2014年3月のロシアによるクリミア併合について、ロシア・ソ連が大陸帝国として持っていた、本国と植民地の地理的・心理的境界の曖昧さという背景を指摘し、またクリミア併合と東ウクライナ介入が相異なる経緯をたどったことを、両地域における対露協力者の質や立場の違いから説明した。大国間の対立や駆け引きが増す近年の世界の混迷については、20世紀的なイデオロギイ的国際関係が終焉し19世紀的な大国競存が再来している面と、にもかかわらず冷戦的な発想や相手国イメージが残存している面の両方を指摘することができる。関連して、

2016年10月の日本国際政治学会では、米国・台湾・日本の研究者によるパネル"Imperial, Post-Imperial, or Pre-Imperial? Global Power Shifts in Historical Perspective"を組織した。

全体として本研究は、これまで別々に論じられることが多かった西欧植民地、日本帝国、およびロシア、清などを包括し、西洋史と東洋史、海洋帝国と大陸帝国といった二分法を超えた比較によって、植民地史の多面性と今日的意義を明らかにすることができた。特に、帝国統治から得られる公共財や大国間の対抗関係を利用する被統治者のしたたかさと、それでも帝国権力や国際的な格差構造に制約される面の両方に目を配り、植民地主義の善悪とは異なる視角からの実証研究を積み重ねたことは、大きな成果だったと考える。

人材育成の面では、多くの若手研究者にシンポジウムや研究会での報告の機会を与えたことのほか、2013年度から15年度まで天野尚樹を学術研究員として雇用したことの効果を特記しておきたい。天野は、2015年2月にシンポジウム「国内植民地の比較史」を同志社大学で開催するなど、多くの研究会の企画・運営に携わって経験を積み、2016年度からは山形大学准教授として活躍を続けている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計78件)

Mizutani Satoshi, "Recovering the Subject in the Shadows of Empires: Colonial Violence and Resistance in Taiwan," *Cross-Currents e-Journal* 23 (2017), pp. 234-248. 査読有
<https://cross-currents.berkeley.edu/e-journal/issue-23/mizutani>

Уяма Томохико, Почему крупное восстание произошло только в Центральной Азии? Административно-институциональные предпосылки восстания 1916 года [宇山智彦「なぜ中央アジアでだけ大反乱が起きたのか：1916年反乱の行政制度的前提」] // Переосмысление восстания 1916 года в Центральной Азии. Бишкек: Нео Принт, 2017. С. 104-112. 査読無
https://issuu.com/margaritalazutkina/docs/collecton_of_articles_1916_protect

天野尚樹「樺太における「国内植民地」の形成：「国内化」と「植民地化」今西一・飯塚一幸編『帝国日本の移動と動員』大阪大学出版会、2017年、113-144頁。査読無

Uyama Tomohiko, "Repression of Kazakh Intellectuals as a Sign of Weakness of Russian Imperial Rule: The Paradoxical Impact of Governor A.N. Troinitskii on the Kazakh

National Movement," *Cahiers du Monde russe* 56, no. 4 (2016), pp. 681-703. 査読有
<https://www.cairn.info/revue-cahiers-du-monde-russe-2015-4-page-681.htm>

Уяма Томохико, Восстание, рожденное в войне: влияние Первой мировой войны на катаклизм в Центральной Азии в международном контексте [宇山智彦「戦争の中で生まれた反乱：中央アジアにおける大難に対する第一次世界大戦の影響と国際的文脈」] // Туркестанское восстание 1916 г.: факты и интерпретации. М.: ИРИ РАН, 2016. С. 77-86. 査読無

Naganawa Norihiro, "A Civil Society in a Confessional State? Muslim Philanthropy in the Volga-Urals Region," in Adele Lindenmeyr et al., eds., *Russia's Home Front in War and Revolution, 1914-22*, Book 2 (Bloomington: Slavic Publishers, 2016), pp. 59-78. 査読無

Maekawa Ichiro, "Neo-Colonialism Reconsidered: A Case Study of East Africa in the 1960s and 1970s." *The Journal of Imperial and Commonwealth History* 43, no. 2 (2015), pp. 317-341. 査読有
doi.org/10.1080/03086534.2014.982406

Mizutani Satoshi, "Anti-Colonialism and the Contested Politics of Comparison: Rabindranath Tagore, Rash Behari Bose and Japanese Colonialism in Korea in the Inter-war Period," *Journal of Colonialism and Colonial History* 16, no. 1 (2015), html形式, 査読有
doi.org/10.1353/cch.2015.0005

Onuma Takahiro, "An Encounter between the Qing Dynasty and Khoqand in 1759-1760: Central Asia in the Mid-Eighteenth Century," *Frontiers of History in China* 9, no. 3 (2014), pp. 384-408. 査読有
doi.org/10.3868/s020-003-014-0027-5

平野千果子「フランス版コモンウェルスとしてのフランコフォニー：その構想と形成」山本正・細川道久編『コモンウェルスとは何か：ポスト帝国時代のソフトパワー』ミネルヴァ書房、2014年、135-159頁。査読無

宇山智彦「変質するロシアがユーラシアに広げる不安：進化する権威主義、迷走する「帝国」」『現代思想』2014年7月号、129-143頁。査読無

Akita Shigeru, "The Aid-India Consortium, the World Bank, and the International Order of Asia, 1958-1968," *Asian Review of World Histories* 2, no. 2 (2014), pp. 217-248. 査読有
doi.org/10.12773/arwh.2014.2.2.217

Onuma Takahiro, "The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors," *Saksaha: A Journal of Manchu Studies* 12 (2014), pp. 33-48. 査読有
doi.org/10.3998/saksaha.13401746.0012.004

Mizutani Satoshi, "Hybridity and History: A Critical Reflection on Homi K. Bhabha's Post-Historical Thoughts," *Ab Imperio* 2013/4, pp. 27-47. 査読有
doi.org/10.1353/imp.2013.0115

〔学会発表〕(計100件)

Uyama Tomohiko, "Uneasy Companions: Relations between the Soviets and Former Activists of the Alash Orda," Central Eurasian Studies Society Annual Conference, 2016.

Nakayama Taisho, "Subarctic Engineers of Karafuto and Subtropical Engineers of Taiwan in Post-War," AAS (Association for Asian Studies)-in-Asia, 2016.

Naganawa Norihiro, "An Imperial Pathway: Karim Khakimov in the Southern Urals, Turkestan, and Iran (1919-1921)," ICCEES (International Council for Central and East European Studies) IX World Congress, 2015.

Kawanishi Kosuke, "Cross-Cultural Aspects of Dai-Toa Kyoei Ken (Greater East Asia Co-Prosperity Sphere)," Slavic-Eurasian Research Center Symposium: Thirty Years of Crisis: Empire, Violence, and Ideology in Eurasia from the First to the Second World War, 2014.

〔図書〕(計23件)

Uyama Tomohiko, ed., *Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order* (Sapporo: Slavic-Eurasian Research Center, 2018), 235 p.

秋田茂編 『「大分岐」を超えて：アジアからみた19世紀論再考』ミネルヴァ書房、2018年、全310頁。

Onuma Takahiro, David Brophy, and Shinmen Yasushi, eds., *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations* (Tokyo: Toyo Bunko, 2018), 284 p.

宇山智彦編 『ロシア革命とソ連の世紀5 越境する革命と民族』岩波書店、2017年、全338頁。

秋田茂 『帝国から開発援助へ：戦後アジア国際秩序と工業化』名古屋大学出版会、2017年、全242頁。

宇山智彦編 『ユーラシア近代帝国と現代世

界』ミネルヴァ書房、2016年、全278頁。

河西晃祐 『大東亜共栄圏：帝国日本の南方体験』講談社、2016年、全317頁。

平野千果子 『アフリカを活用する：フランス植民地からみた第一次世界大戦』人文書院、2014年、全166頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇山 智彦 (UYAMA, Tomohiko)
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授
研究者番号：40281852

(2) 研究分担者

秋田 茂 (AKITA, Shigeru)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：10175789

小沼 孝博 (ONUMA, Takahiro)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：30509378

河西 晃祐 (KAWANISHI, Kosuke)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：10405889

平野 千果子 (HIRANO, Chikako)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：00319419

前川 一郎 (MAEKAWA, Ichiro)
創価大学・国際教養学部・教授
研究者番号：10401431

水谷 智 (MIZUTANI, Satoshi)
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：90411074

(3) 連携研究者

長縄 宣博 (NAGANAWA, Norihiro)
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授
研究者番号：30451389

(4) 研究協力者

天野 尚樹 (AMANO, Naoki)
山形大学・人文学部・准教授

中山 大将 (NAKAYAMA, Taisho)
京都大学・東南アジア地域研究研究所・助教